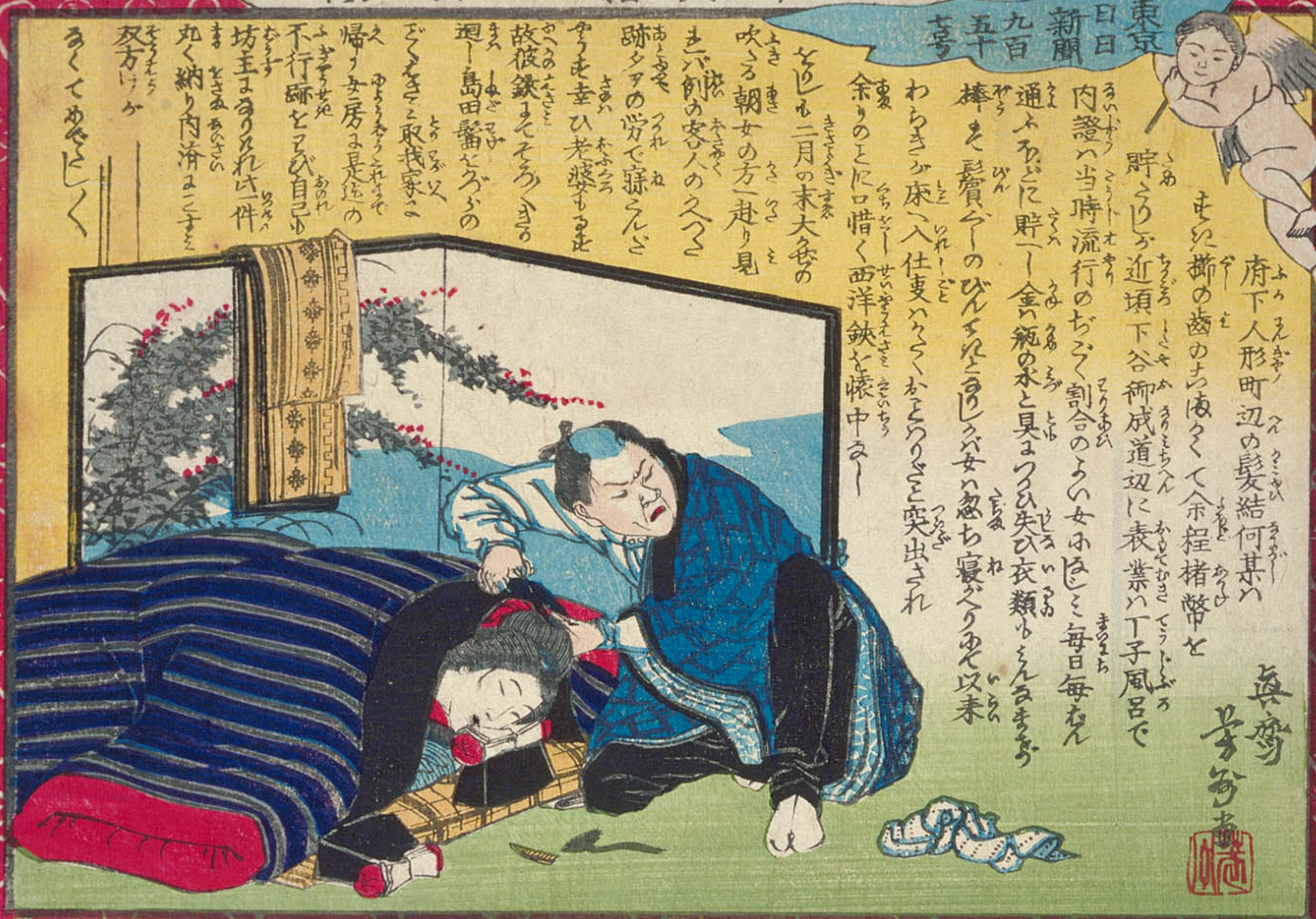


大日本国絵入新聞 第十号



東京 府下人形町辺の髪結何某の
 野之りや近頃下谷御成道辺に表葉の丁子風呂で
 内證の当時流行のおく割合のよの女小は毎日毎
 通ふおに野一金瓶の水と臭つひ失ひ衣類もま
 棒を髪今へのびんをさし女に忍ち寝ぐりて以来
 わらさ床へ入仕更にくくかとのりとと突出され
 余りの口惜く西洋鉄を懐中す

二月の末大巻の
 吹る朝女の方一赴り見
 まば創め客人のへへ
 跡々の旁で跡こんど
 幸ひ老婆もま
 故彼鉄もそあま
 廻り島田齋とろふの
 取捨家
 帰る女房は是迄の
 不行跡とて自己の
 坊主よりなれば件
 丸く納り内済ます
 交方いか
 るくてめどしく

真琴
 芳谷



東京 府下人形町
 足柄縣士族藤牧光輝の伴貞甫に家督とゆづり
 居る一々東京一出たる町に宿をとりて居るに
 小田川善右門が妻おきんと折く面會
 娘おねは族の華族如藤實明弟何某と多
 居るをきかちり昨年十二月十六日如藤氏の
 おきむき僕小田川善右門より
 頼もき参りたるものなりその次第
 人のむすめを妾に差し
 あいとの跡目相續の智養子
 小田川一家を引とり下さる何れもは相續
 されと談しなれば如藤氏のこにては此やうなか
 交さるてい如何ると段々分合三回手打
 たりりか此頂其悪吏か
 二十年の
 處せられ

重入形町上座屋板